

14. 頬部軟組織に認められた異所性石灰化の2例(一般講演)(第10回東日本学園大学歯学会口腔外科研究会)

著者名(日)	富岡 敬子
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	12
号	1
ページ	127
発行年	1993-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00007850/

14. 頰部軟組織に認められた異所性石灰化の2例

口腔外科学第一講座
富岡 敬子

口腔外科領域の軟組織中にみられる異常な石灰化物としては、唾石が多く、その他では血管腫中に見られる静脈石などがある。このたび私達は、以下の様な特異な石灰化物をみた2症例を経験したので、その概要を報告した。

症例1は、62才の女性で、ウ蝕治療を希望し、某歯科を受診、その際X線撮影により右顎下部から頸部に異常な不透過像を認めたため、当科に紹介され受診した。視診、触診上では特に異常所見を認めなかったが、X線像により、右顎下部に全体として拇指頭大の不規則な不透過像の集合物を認めるとともに、それより下方に大豆大から米粒大の不透過像が数珠状に連なっている像と、左

顎下部にも1個大豆大の不透過像をみ、さらに胸部でも粒状の不透過像が散在性に認められた。本症例は25年前に肺結核の罹患の既往があることから、石灰化を伴う陳旧性の結核性リンパ節炎と診断した。

症例2は、59才の男性で、ウ蝕治療に先立ちオルソパントモ撮影を行ったところ、右上第2小臼歯と思われる埋状歯を認めたため、当科に紹介され来院した。当科でのX線撮影の結果、右側顎下部から側頸部にかけて小豆大から米粒大の不透過像が散在性にみとめられた。患者の既往および臨床検査所見から、結核性リンパ節炎を疑わせる所見はなく、臨床診断として多発性粟粒骨腫が最も疑われた。